

同じ空の下で

坂井 奈津子

暑い。とにかく暑い。

i P h o n e に表示された33度という気温よりも、被っているはずの帽子の存在を無視して、頭上から貫通してくる日差し。上からも下からも熱された、私の周り全てを包むもやっとした空気。

そして、何より狭い歩道に溢れかえる観光客。通りに面した店の中から勧誘し続ける店員。彼らが周囲に気にすることなく発し続ける、日本語、方言、韓国語、中国語、英語、ポルトガル語……。それら全てが混じった音とそれらが含む熱気が耐え難かった。

「めんそーれー」ともう何十度目の勧誘を受けた時だった。

「ババババツババババツ ババババツババババツ」

それまで観光地に溢れていた音、話し声、足音、車が行き交う音、喧騒、全てをかき消す機械的な音がした。

反射的に顔を上げる。目に直接日光が飛び込んでくる。強すぎる日差しに一瞬顔をしかめると、次に青い空が視界いっぱい広がる。そしてその真っ青の中に、黒い点がポツツと一つあった。よく見ると、それは迷彩柄のヘリコプターだった。

「観光地」で聞こえた大音量の「ヘリコプター音」。思わぬ事態に直面して、私の足は止まっていた。「観光地」と「ヘリコプター」の組み合わせはあまりに不釣りあいだった。

それでも、私に声をかけた店員はヘリコプターの音などしなかったかのように、話続ける。通りに視線を戻すと、そこでは相変わらず音が溢れていた。

日が落ち、空気が含んでいた熱気が徐々に消えていく。ぬるくてゆるい風がゆっくり吹き付ける。泊まっているゲストハウスは海のすぐ真横にあった。駅からは歩いて10分と少し離れており、昼間、駅に向かうときは地獄のような暑さを味わうが、日が落ちると、湿度の高い空気と、吹き続ける風のおかげで、今からどこか歩いて行きたいと思うほど、快適だった。

そうして、歩いてゲストハウスに戻ると、共同キッチンと隣接するダイニングから賑やかな音が聞こえてくる。20代〜30代の男性が3人と50代くらいの男性が1人。少し不思議な4人組はどうやら酒盛りをしているらしかった。

この前行ったキャバクラは可愛い子が多くてよかったなどと、一番年上の人が大声で話す。共用スペースで大の大人がそんな下らない話で騒ぐなんてと、少し眉をひそめる。暇だったからダイニングで本を読もうと思っていたけれど、諦めよう。

「一人旅にはタバコがいい」という先輩のアドバイスにしたがって、私はタバコを持って来た。ていた。

ダイニングを突っ切って反対側の扉を開けると、そこは喫煙所になっている。3人掛けの本のベンチが2つ。さらに、大きな机が置いてあり、灯りはなくてもゆっくりできるスペースになっている。

ゲストハウスに住み着いているのであろう猫とタバコを吸いながら遊んでいた。

「この猫って飼われてるんですかね？」

5分くらいいたら遊んでいたのだろうか。ふと、振り返ると先ほどの4人のうちの一人が立っていた。20代後半だろうか、背が高くてがっちりしている。

「どうですかねー」と返す。

隣に来た彼は、持っていたマルポロを啜っていた。

そうして私たちは話始めた。

歳やどこから来たのかなどを話しているうちに、先輩がタバコを進めて来た訳がわかった気がした。喫煙所とタバコ。それだけの共通点があるだけで私たちは話させるのだ。さつきまで、うるさく騒いでる奴らだと思っていたのにもうだいぶん会話が続けていた。

そのうちに4人のうちのもう1人も喫煙所にやって来た。彼はメビウスの青い箱を手に行っている。

「夜だと涼しいすねー」と言いながら彼も一緒にタバコを吸い始める。

どうやら彼らは、明日には帰るらしく、今日が沖縄滞在の最終日らしい。

後から来た方は、背はそこまで高くないが同じく筋肉質な体型だった。2人ともどこか似たような雰囲気をしていて、一体彼らはどんな繋がりがあるのだろうかと考えていた。がっちりした体型で、体育会系のハキハキした話し方、タバコを吸っているものの健康的だ。そんなことを考えていると、後から来た方が、声をかけて来た。

「お酒余ってるんで、よかったら一緒に飲みませんか？」

さつきまで、嫌悪していた集団と気づくと乾杯をしていた。全員がタバコを吸うこともあり外の喫煙スペースの横にあるベンチと机を活用していた。

ゆるく吹いてくる風が気持ちいい。

話していくと、彼らは会社の同僚で、一番年上の人が上司だという。明日はみんなで名古屋に帰るんだ。ということも教えてくれた。だが、そこまで言って職業は教えてくれない。少

し突っ込んで見ると、聞かれたくないというような雰囲気とどうしようと困惑した視線を一番年上の上司に送っていた。気まずい雰囲気になったことを察して、急いで私は話題をかえる。

「沖縄で一番楽しかったところ、どこですかー？」

そこから、気づくと2、3時間経っていた。2リットル入っていた泡盛の紙パックはいつの間にか4分の1ほどの軽さになっていた。

明日、娘に久しぶりに会うのだと上司の人が話している。彼には私の1つ下の娘がいるらしく、最近の大学生の風紀について根掘り葉掘り聞かれた。どうやら娘が本当に心配らしい。沖縄に出張がある仕事なんていよいよ何の仕事をしているのか気になり、尋ねてみると。

「まあ、最後だから言ってもいいかぁ」と上司の人が口を開く。

「俺たち機動隊なんだ」

沖縄と機動隊。そして、少し言いにくそうな彼らの表情。すぐに、彼らの職業と基地が結びついた。ニュースやドキュメンタリーで見た、無表情で立つ機動隊員と基地建設に反対する抗議者たち。もしかしたら目の前にいる彼らはそこに立っていたのではないか。

「娘のお土産何がいいかなあ」

上司の人は、アロハシャツにするかはまた別のものにするか、どうしようと悩み続ける。せっかく買っても、娘に使ってもらえないかもしれない。冷たくあしらわれたらどうしようと本気で不安らしい。

「お前ら一つずつお土産で買った方がいいもの挙げていけ。」と、部下の3人に振り、気づくと大喜利大会になっていた。

私にはテレビで見た無表情な基地の前を塞ぎ続ける機動隊員と、目の前にいる酔っ払って明るく愉快な彼らは結びつかなかった。

最終日。お金がないのと、少しはこっちの暑さに慣れて来たので、空港まで歩いてみようと思いついた。ゲストハウスからは5キロほど。途中にお土産を買ったり、寄り道をしながら向かえば、沖縄を最後まで楽しめるだろうと、ワクワクしながらゲストハウスを後にし

た。

両肩も足も重い。頭上から炙ってくるような日差しが辛い。

だが、空港まではやつと3キロを切ったところだった。パンバンのリュックと両手に持っているお土産が重い。軽い気持ちで歩こうと思っていたた自分を後悔しながら足を勤める。駅からは2キロほど離れてしまっており、戻る気も起きなかった。疲れたらどこかによって休憩しながら歩けばいいと思っていたのだが、中心地と空港周辺を隔てる川を渡ってしまおうと、それまで立ち並んでいた店は消え、民家ですら見えなくなった。

代わりに、道の横にいるのは、金網に囲まれたアメリカ軍の基地だった。

右側には空港に向かって伸びる太い道。左側には延々と続く金網と基地。その間にある、誰も通らない歩道を私は歩きつづける。左側を見るとところどころ建物が見える。あそこの中には涼しく休めるところがあるのだろうか。と朦朧とした頭で考える。でも私に知るすべはない。

私のすぐ真横にある金網は、一切の緩みなく太さ3cmほど、ぴっしり編み込まれた針金が並んでいる。そして、白地に赤い文字の看板が「WARNING KEEP OUT 警告 立ち入り禁止」と何度も警告してくる。さらに、金網の上には有刺鉄線が張られており、「もしここで倒れても絶対に助けてもらえないな」と直感した。

暑さにやられて来たのと、その無機質で高圧的な態度の金網にだんだん腹が立って来て、私はより意地になって歩き倒してやると、足を進める。だって、自分の国じゃ無いのに何でこんな堂々と、まるで当たり前でもいうような顔をして居座っているなんておかしいじゃないか。

そうして、ヤケクソになりながら歩いていると、ふと、4年前にも同じ道を通ったことを思い出した。

4年前の3月、友達同士で沖縄に行った。卒業旅行の学生をターゲットにした3万円ほどの激安パック。子供同士で飛行機で海を渡って、遠くに行った。それだけで、海も空も2倍、3倍に鮮やかに焼き付いている。

そして、この道を通った時に、海が見えたのだ。大型の観光バスの中、左手側には、普段の青い海とは違う、エメラルドグリーンに輝く海が広がっていた。それを見た瞬間、本当に沖繩にきたのだという実感と、これから3日間沖繩に何があるのだろうかという期待が一気に膨らみ、友達同士、みんなで歓喜の声をあげていた。

4年前は、金網なんか見えなかったし、海もあんなに大きく見えた。でも、今は金網越

しに基地が広がっていて、その奥に少しだけ海がチラチラ光っているのが分かる。4年前は、バスガイドが「左手に見えるのは米軍基地で、沖縄県内の各所に点在しています。」というアナウンスに気にもとめなかった。当たり前前に飛ぶヘリコプターにも全く気づかなかった。

私がいるのは4年前と同じ場所ではないのだろうか。私は今、一体どこにいるのだろうか。

金網の向こうには日本とアメリカ両国の国旗が揺れていた。